

夢の物語論的現象学分析 ——手作りの科学としての夢研究をめざして

渡辺恒夫 東邦大学名誉教授
WATANABE Tsuneo Emeritus Professor at Toho University

要約

非専門家、「素人」でもできる手作りの科学としての夢研究法をめざし、夢の物語論的現象学分析を構想する。「実践基礎編」では、夢日記のウェブサイト上の作成から始まり、ユングに基づく夢の物語構造分析、ポップカルチャーに示唆を得た夢の異世界分析、「夢世界の原理」に基づく現象学的分析の三段階を経て夢の意味に到達するという物語論的現象学分析が、手作りの科学に相応しい分析法として提唱され、著者自身の夢日記からの事例の一つについて実践された。「理論編」では、現象学的夢分析の源流を、ジオルジの記述現象学と、フッサール志向性分析に基づく渡辺の夢の現象学の試みに求め、さらにレイコフのメタファー論を援用することで、「夢世界の原理」の成り立ちを明らかでできることが示された。「実践応用編」では、実践基礎編の続きとして3事例から成る夢シリーズに物語論的現象学分析を適用し、夢の意味すなわち深層のテキストに到達することを試みた。「考察と結論」では、本稿で用いた夢の現象学的分析と夢の神経認知説とが、相互補完的關係にあることが論じられた。最後に、AI支配の世界の到来にあたって手作りの科学という新しい科学の形を構想することの意義が、改めて述べられた。

キーワード

非専門家、ウェブサイト上の夢日記、ユングの物語構造分析、「夢世界の原理」、フッサール志向性分析

Title

Narratological Phenomenological Analysis of Dreams: Toward Dream Research as a Handmade Science

Abstract

We propose a method for dream research as a handmade science that can be undertaken by "non-experts". In §1, "Practical basics", a step-by-step method is proposed, beginning with creating a "dream diary" website, as suitable for this handmade science. This method, termed "narratological phenomenological analysis of dreams", consists of three steps: Jung's story structure analysis, popular culture-inspired "different world" analysis, and phenomenological analysis based on the "dream world principle". Applying these steps to a dream sample taken from the author's dream diary website, we arrive at the meaning of the dream. In §2, "Theoretical considerations", the origin of phenomenological dream analysis is sought in Giorgi's descriptive phenomenology and Watanabe's dream analysis based on Husserl's intentional analysis. Lakoff's theory of metaphor is also shown to be important. In §3, "Practical application", the analytical method proposed above is applied to a series of three dreams. In §4, "Discussion and conclusion", we examine the complementary relationship between the phenomenological analysis of dreams used in this paper and a neurocognitive theory of dreams.

Key words

non-experts, dream-diary on website, Jung's story structure analysis, "dream world principle", Husserl's intentional analysis

I 問題

夢研究を手作りの科学として発展させるための方法を構想し提案することが、本稿の目的である。その方法の柱となるのが、夢の物語論的現象学分析とここで名づける夢分析法である。

まず、手作りの科学とは何か。これまでも科学研究の専門家による独占を打破すべく、非専門家もしくは「素人」による科学研究参加を唱える主張が、「市民科学」(平川, 2010 参照)や「オープンサイエンス」(Nielsen, 2013/2012)等として現れている(「非専門家」はその領域では素人であっても他の領域では専門家でありうるのに対し、「素人」はそもそも科学研究一般に対して素人であるというニュアンスの違いがあると思われるが、本稿では厳密に区別していない。「素人」という語にはやや軽んじる響きがあるとはいえ、インパクト性もあるので、使うべきところでは括弧つきでも使う)。けれども前者は、「生活者の視点から気になる科学技術の問題について、勉強会や研究活動を」(平川, 2010, p.238)行うというもので、原発や遺伝子組み換え技術が例として挙げられているように、「研究」というよりも「社会運動」の色彩が強い。後者は、宇宙観測技術の飛躍的発展が生み出す膨大なデータがインターネット公開され、銀河の分類作業に非専門家が参加して成果を生み出しているという例が挙げられているように、多忙な専門家の「お手伝い」的色彩が強い。そしてともに、確固たる専門領域と専門家集団の存在を前提としている。ここで主張する手作りの科学では、非専門家を中心となって研究を推進できることをめざす。

夢研究を、手作りの「科学」として発展させることが可能もしくは必要と思われる点を、以下に夢研究の特徴を列挙することを通じて簡単に示す。

(1) 複数の理論が現在も競合している状態で定説がない。ちなみにドムホフ(Domhoff, 2019)によると、有力な夢理論は、1. 精神分析の理論、2. ホブソンの脳科学的な活性化-合成説、3. 夢は記憶の整理に役立つという記憶固定説、4. 脅威的狀況のシミュレーションとして先史時代には適応的だったという進化論的仮説、5. 夢は脳のデフォルトモードである心のさ

迷い歩きが強調されたものだとする神経認知説、に分類されて現在も競合中とのことである。このような研究状況は、非専門家の参入にとっての動機づけとなる。 (2) 理論的のどの立場を取るにせよ基本的なデータは夢見者本人の報告であって、「素人」に利用が難しい観測装置や調査フィールドや解析技術なしでデータを採集し、取り扱うことが可能である。 (3) 誰もが体験する身近な現象として、「なぜこんな夢を見たのか、その意味は何か」という問いは日常的に起こるものであり、夢の研究は自己探求、自己啓発にとって有意義と感じられるにもかかわらず、(1)の諸理論を見ても現代の夢研究は夢の機能とメカニズムの解明を目指すか、意味を問題にしても臨床に役立てることを主眼としており、自分自身の日常見る夢の意味について直接応えるものになっていない。

次に、本稿でいう非専門家とは何かを明確にするため、逆に専門家を、(1)の諸理論に代表されるこれまでの夢研究を行うのに必要なテクニカル(技術的)な素養を身に着けた者、としておく。テクニカルな素養とは、臨床か実験か調査に必要な技術と経験のことである。それ以外が非専門家ということになる。とはいえ、非専門家中心の手作りの科学といっても、夢を見れば誰でも明日からできるというわけではない(将来の目標とはしたいが)。テクニカルならぬ一般教養と文化的関心が、本稿での分析法に面白さを覚えるためには必要となろう(手作りの科学は仕事として行うわけでないで、「最低限の理解」より「面白さ」が出発点ではより重要である)。

本稿は三つの主要部分から成る。

第一部は、実践基礎編である。夢の物語論的現象学分析を方法として、実際に手作りの科学としての夢研究を行って見せることである。第二部は理論編である。実践基礎編で用いた夢の現象学的分析について、その理論的根拠を明らかにすることであり、それには夢の現象学的分析の新たな方法論的展開を推進する必要がある。実践編の次に理論編が来るのは研究論文の書き方として順序が逆と思われるかもしれないが、論述形式としての順序ではなく研究と思索の順序としては、まず実践してみて理論的に不十分と自覚された部分について理論的考察を行う、というのが自然の流れなのではないだろうか。本稿もそのような流れに従った。第三は実践応用編と名づけた。実践基礎編では夢分析

の対象を1事例に限ったが、理論編で培った自信をもとに、多数事例からなる夢シリーズ分析を試みる。

最後の「考察と結論」では、夢の現象学的分析が現代科学の知見とどれくらい両立可能であって統合の見通しがあるかを検討し、手作りの「科学」というにふさわしいものにすべく努める。なお、本稿は、手作りの科学の実践例示と理論的考究という二重の目的を含むため、データ、手続き、結果、考察の順に進行する通常の研究論文の形式とは異なる書き方をしていることを断っておく。

II 実践基礎編 夢の物語論的現象学分析へのステップ

II-1 最初のステップ：データ収集の段階

(1) 夢日記をつける

冒頭に述べたように本稿の目標は、夢研究を手作りの科学として発展させるための方法を構想することであった。以下、読者が自ら実践を試みるか、非専門家向けのウェブサイト作成にそのまま活用できるよう、あまり論文風にならないように述べていく。文献の参照も最小限にとどめる（専門性の壁を厚くしている元凶の一つが引用文献リストの必要以上の多さである。本稿の趣旨からして、「理論編」の部分を除いては文献引用を最小限にとどめる方針を取る。多すぎる引用文献の弊害については山内（2001）を参照）。

まず夢日記をつけること。これは誰でも明日からできそうである。

といっても、夢はすこぶる忘れやすいから、目覚めてすぐ書き留めるようにするのがいい。

もっとも、多忙な社会人にそんな時間はないかもしれない。筆者がやっている方法で、キーワード式夢想起法と名づけた方法がある。枕元に置いておいたノートに（スマホでもいい）、2語か3語、その夢から取った語を記しておくのである。「宇宙人の侵略 海のそばのマンション 逃げ惑う」といった具合に。

そして、通勤通学の電車で、ノートやスマホを取り出して読み返しているうちに、忘れたと思っていた夢全体が、芋ズル式にズルズルと引き出されて来ることがある。それを書き留めるのである。

ただし、毎日記録しようなどとは思わない方がいい。ひと月に1、2回くらいでいい。あまりのめり込み過ぎると、現実生活の方がおろそかになってしまう。よく、夢日記を付けると気が狂うといった都市伝説のたぐいを耳にすることがあるが、これは単に、熱心になり過ぎて遅刻常習犯になるなど、日常生活に不都合が生じる、ということだろう。

また、現実の状況→夢内容→付記、という順に三つの部分からなるように記録しておくことが望ましい（表4参照）。「付記」はその時気づいたことを書いておくのであるが、夢の意味を分析する段になって、夢記録の際に思いついて書いておいたことが役に立つことがある。

そうやって夢記録があるていど溜まったら、スマホや紙のノートに書きっぱなしにして置かず、必ずパソコンに打ち込んでおくことだ。

(2) 夢データのウェブ公開とネットワーク化

第二のステップは、ウェブサイトを作ってインターネット上に公開することである（それも何らかの形で身元を明かして）。筆者はブログを使っているが、ツイッターでもフェイスブックでもいい。

なぜ公開するかというと、まず、公開することで自分の夢記録をおのずと何度も読み返すことになり、いろいろ新しい発見が得られるという利点がある。

次に、公開することは自分の研究に責任を持つことである。だから本当に研究をしようとするなら、サイトも実名でなければならぬ。覆面作家というものはいても、覆面研究者というものはありえないのだから。

また、最近は研究倫理が厳しくなっていて、薬の臨床試験のような侵襲性ある医学研究でない、心理学や社会学のアンケート調査の類でも、所属の機関の倫理委員会に研究計画を提出することが求められることがある（たとえば、日本心理学会倫理委員会、2009）。自分の夢だからいいだろうと思っても、夢に実際の人物を登場させると、思わぬプライバシーの侵害や名誉棄損にさえ発展するリスクがある。そのための匿名化の処置も必要だ。絶対記録しておきたい夢なのに、内容的に公開には不適切という場合もあるだろう。そんな場合、筆者は、自分のブログの下書き機能を使って、とりあえず下書きのままにしておく。

夢サイト公開の最大の目的は、夢記録を公共的にア

アクセス可能なデータ化することである。(原理的には)誰でもアクセス可能なデータに基づくというのが、科学研究の最低限の要件の一つなのだから。

自分の夢を公共性あるデータにすることは、同じように他の人によってウェブサイト公開された夢をも参照・引用できるということである。その際、サイトの主の直接の許可は必ずしも必要ではない。引用元のURLとサイト主の名をしっかりと記しておくだけで、十分だろう。ただしセラピスト等の立場になくて生活歴の情報が欠如する場合、他者の夢分析はテキストのみに依存する分析になってミスリーディングの恐れが出てくるので(Lakoff, 1997; Bolognesi & Bichisecchi, 2014)、他者の夢が自己の夢と同じ程度に分析対象になるわけではない(自分の夢であってもその時の生活歴の情報は後に思い出せなくなることがあるので、II-1で述べたように「現実の状況」「付記」の欄は漏らさず書いておいた方がよい)。むしろ学ぶべきは他者が夢をどのように取り扱っているかという分析の方法である。分析の方法を互いに批判し合うことが、科学研究のコミュニティ形成の第一歩になるのである。

そのようにして、夢データのネットワークができてくると、やはり、全ての公開可能な夢のテキストを集積して、だれでも研究に使えるような、ドリームバンクといったものが欲しくなる。そのようなドリームバンクは、カリフォルニア大サンタクルーズ校に実在している。夢の統計的研究の先駆者ホール(Hall & Van de Castle, 1966)が集めた夢を土台に、後継者のドムホフらが中心になって発展させた、2万例を超える夢テキストの集積だ(Schneider & Domhoff, 2019)。その8割は英語、残る2割はドイツ語で書かれていて、日本語版ドリームバンクはまだないようであるが、実現すれば私たちにも自分の夢と他の人の夢との差異と共通性が手に取るように分かって来る。たとえば筆者は「他の誰かになる夢」というものを見るのが稀ならずあるが、他の人に聞くとそのような夢は見たことがないという答えが多い。そこで夢のテーマを調査した文献を上述のドリームバンクにアップロードされた論文を手掛かりに探すと、たとえばカナダ人大学生では「自己変身夢(self-transformation)」を見たことのある率は18.3%であり、16にまとめられたテーマでは2番目に低い、という調査結果が出てくる(Nielsen, Zadra, Simard, Saucier, Stenstrom, Smith, & Kuiken,

2003)。ちなみに最高は「墜落-飛行」の85.2%、次は「追われる-恐怖」84.8%だった。また自己変身テーマについて「自己像の不安定性もしくはフレキシビリティの疑い」(p.230)とコメントがあり、自分でも思っていたことと符合した。

このように大規模調査データとの比較によって、自己認識を深めることもできる。とはいえ、数量的取り扱いには非専門家には壁が高いこともあるので、大規模データとの比較は、「可能なら」というにとどめておきたい。

II-2 夢分析第1ステップ:

ユングの物語構造論的分析

そしていよいよ、夢分析にとりかかる。

前述したように私たちは、なぜこんな夢をみたのかその意味を知りたいと素朴に思うところから夢に興味をもつようになることが多い。フロイト(Freud, 2007-2010/1942)やユング(Jung, 2016)の深層心理学的な夢分析も、そのような自然な問いに答えるべく考案されたといつてよい。

けれども、少し待ってほしい。そもそも夢の世界とはどんな世界かが分からないままで、夢の意味を知ることができるのだろうか。現実の社会を生きて見ない限りその意味が見えてこないのと同じく、夢という世界を十分に探検することなくして夢の意味は見えてこないのではないか。

とはいえ、夢世界の探検といっても、何をどうするところから始めたらよいか、見当がつかないかもしれない。そこで推奨されるのが、夢の物語構造分析である。この分野でもユングは第一人者だ(夢の物語としての構造と、ユングのこの分野での影響力については、キルロー(Kilroe, 2000)参照)。ギリシャ悲劇の構造分析を行ったアリストテレスの『詩学』に学び、ユング(1974)は、夢を4幕劇として理解することが夢分析の第一歩だとする(pp.80-81。以下、ユングの原文では「序幕」「第二幕」といった表現は直接には使われていないが、分かりやすさのため用いることとする)。

- 序幕 提示(opening exposition phase) —— 場所、主人公、(場合によっては)時間の指示から成る。

しばしば夢見者の最初の状況を示す。

- 第二幕 展開 (development of the plot) —緊張が高まり夢の中の状況が複雑化する。
- 第三幕 クライマックス (culmination) —何か決定的なことが起こるか事態が完全に変化するかする。危機 (crisis) とも言う。
- 終幕 終結 (ending) —解決もしくは破局 (solution or catastrophe) を表すが、往々にして欠落することもある。

実際に4幕劇の構成になっているかどうか、筆者自身の、それも最近の夢で試してみよう(表1)。なお、本稿の元になる着想を得た日から遡って夢日記サイトに記録されていた5つの夢事例を、「最近の夢」シリーズとして実践編Ⅱ・Ⅳで分析対象とする(実際にはスペースの都合で4つしか誌面には載せられなかったが)。従って夢事例1はこのシリーズ中では最も古いことになる。また、本稿で引用されている全ての夢事例について、Ⅱ-1(2)に記した方針にもとづいた匿名化等の倫理的配慮がウェブサイト掲載時点でなされていたが、本稿引用時に再度チェックして確認した。夢事例はウェブサイトから印刷して保管した。

「夢事例1」をみると、何となく4幕構成に分析できることに気づく。つまり、夢内容が4段落に分けて記述されているが、その4つの段落が4幕にぴったり符合するように思われる。

- 序幕 (提示) 二階寝室からT大キャンパスを眺めていた。
- 第二幕 (展開) トイレに行きたいシャワーも浴びたい。寝室内で済ませてしまうか階下へ行くか考えた。
- 第三幕 (クライマックス) 後者の考えが即、現実化し階下へ行くと母が起きていた。
- 終幕 (終結) すぐ二階へ戻った(考えただけで即、瞬間移動した)。

という具合である。

ここで、冒頭に「最後の場面しか思い出せない」とあるからには、この夢はもっと長い夢の一部であって序幕や第2幕は忘れられているはずなのに、この部分だけで4幕構成が成立しているようなのは不思議に思われる。これについて筆者はこう考えている。夢とい

うものは物語の形式を取らない限り、回想され報告されることは難しい。逆にいえば、長い夢の最後の断片だけが回想されるとしても、4幕劇という物語形式を取らざるを得ないのだ、と(一般に物語形式の記憶が忘却されにくいことについては、エビングハウス以来の記憶忘却研究概観でも認められている。たとえば、Thalheimer (2010) 参照)。

Ⅱ-3 夢分析第2ステップ：異世界分析

4幕劇という物語構造が分かったとして、次に行うべき夢世界への探検が、夢の異世界分析である。

聞きなれない言葉と思うが、これは、最近の若者向けポップカルチャーで、ライトノベルや漫画やアニメのジャンルに、「異世界転生もの」と言われる作品が多いことで思いついたものである(たとえば、ハンのアニメ雑談, 2018 参照)。たとえば、異世界転生ものの代表作とされる『転生したらスライムだった件』(伏瀬, 2014-2019)では、主人公は現実世界では事故で死ぬが、気がつく異世界でスライムとして生まれていた。どうして異世界と分かるかという、自分がスライムになっているのに加えて、ドラゴンやドワーフや魔女といった空想世界の存在が次々と出てきて、現実世界ではあり得ないことが起こるからだ。

夢を見ることもまた、一時的な異世界転生と考えることができる(本稿で夢の研究に「異世界」という名称を使う発想の元は、夢の現象学では夢を現実世界と対等なもう一つの世界と見なす(Usler, 1990/1969), ということに由来する。また、同じ世界といっても現実世界とは異質であるから、「異世界」と呼ぶのである(渡辺, 2016))。だから夢の異世界分析とは、夢の中から現実とは違ったところ、ありえないところを見つけ出すのが役目ということになる。順序を追って見ていこう。

- 1) 序幕: 「二階寝室からT大キャンパスを眺めていた」勤務先だったT大学のキャンパスを見下ろすマンションに住んだことはなく、現実とは違っている。
- 2) 第二幕→第三幕への移行: 「それとも階下へ行くべきかと考えた」→「すると、後者の考えが即、現実化し、階下へいった」。夢の記述にもすでに解

表1 夢事例シリーズ (引用元は「付記・謝辞」参照)

【夢事例1】「T大学そばに二階寝室がある」2019年11月10日。朝。ザワザワと賑やかな世界にいた。最後の場面しか思い出せない。

〈内容〉T大学のキャンパスを窓から見下ろすマンションの二階が寝室になっていた(事実ではない)。そこから、何かのイベントで人が集まって来るのを、眺めていた。朝だった。

トイレに行きたく、シャワーも浴びたいので、寝室内で済ませてしまおうか、それとも階下へ行くべきかと考えた。

すると、後者の考えが即、現実化し、階下へいった。母が起きていた。

そしてすぐ、二階へ戻った(考えただけで、即、瞬間移動した)。

〈付記〉それが、思い出せる全てになってしまった。目が覚めた当時は、もっと前まで憶えていたはずだったが、ベッドの中で15分ばかりグズグズしているうちに、忘れてしまった。

【夢事例2】「海の彼方からの侵略で逃げ惑う夢」2019年11月17日。

〈内容〉海のそばに建つ大きなマンションのような建物の中に、たぶん十人前後の仲間たちといた。

何が海の彼方から侵略しに来るといっているので、建物の内部をにげまどっていた。宇宙人かも知れない。でも、私たち以外の人々は、知らないようだった。

マンションも危なくなったので、隣する、研究所らしき敷地に、無断で入り込んだ。窓の中に、所員らしき人影が、デスクワークにいそしんでいるのが見えた。

と、警戒音が鳴り響く。とはいえ、研究所の中の人々に目立った動きはないので、無視して敷地を突っ切る。

〈付記〉憶えているのはこれだけだ。本当はもっと長いストーリーがその前にあったはず。目ざめてすぐメモしておけば芋蔓式に夢全体がたぐり寄せられると思って、3行ほどメモをしておいたのだが、正午ごろになってこうして書きだして見ても、メモ以上には何もよみがえらない。

【夢事例3】「赤茶けた雄大な風景」2019年11月29日。最初の方は例によって憶えていない。

〈内容〉S君が出てきて、何か話したような気がするが、はっきりしない。とにかく、自然の風景の中を、自転車を走らせているのだった。

山腹のようなところで、町に向かって行くつもりだったが、ある道を選んで行くと、さらに二股に分かれる。その左側を行くと、どうやら道を誤ったらしく、大きな谷間に沿って道は少しづつ登り坂になっている。

これでは町とは反対方向になってしまう。

大きな谷の、赤茶けた雄大な風景がひろがる。

すると、Y先生がスマホに電話してくる。C市と連絡が付いたから、話してみるか、とのこと(この辺、電話の相手のY先生が、直接出てきたような気がする)。道に迷っているので助け舟を出してくれるだろう、という意らしい。Y先生は政治力があるから、可能かもしれない。

この辺で目が覚めた(午後2時ごろ)。

【夢事例4】「子犬が蟬になる夢」2019年12月4日。前の方は憶えていない。

〈内容〉子犬のような何かと友だちになったのだった。

そのうち、その何かは、ビニール製の犬小屋のような中に籠ってビニール製の壁にくっつき(図省略)、「アリガトウ」と呟く。そして、動かなくなった。蛹になりつつあるのが分かった。

背中がしだいに割れて、巨大な蟬が姿を現す。

その後、蟬は、飛んで行ったわけではなく、ペット屋みたいなのがいる、そこに貫われて行った。

そこに、妻が戻ってくる。せつかくの脱皮の場面は見なかったのだが、何か言った。

私は、これがそうだと、ペット屋の屋台のようになった店先を指差す。

このあたり、店先の光景は、記憶が薄れてぼんやりしているのか、それとも元々ぼんやりした光景なのかは分からないが、はっきりしない。後者かもしれない。夢の中で、随分ぼんやりしてるな、と思ったことを覚えているような。

〈付記〉脱皮して巨大な蟬が現れるのは、涼宮ハルヒシリーズの「エンドレスエイト」で、〔主人公の〕キョンが、等身大の蟬が戸口を叩く場面を想像して気分が悪くなったというくだりを、連想させる。

「アリガトウ」は、同じシリーズの『涼宮ハルヒの消失』で、〔ヒロインの〕長門有希がキョンに、「ありがとう」という場面を連想させる*。

*引用元註:「涼宮ハルヒシリーズ」は、谷川流によるライトノベルおよび京都アニメーション制作のアニメ化作品。「エンドレスエイト」(谷川, 2004b)も『涼宮ハルヒの消失』(谷川, 2004a)もシリーズ中のエピソードである。

表中〔 〕内は本稿での注記。

積が織り込まれているが、階下へ行くべきか考えただけで階下にいる。これは、思っただけで目的の場所へ瞬間移動する魔法みたいなものであって、まさに異世界である。

- 3) 第三幕：「階下へいった。母が起きていた」。母は8年ばかり前に物故している。物故者が生きていたこともありえないことである（ちなみに前述のカナダ人大学生の調査では、物故者が生きて出てくる夢は38.4%が経験ありと答えている（Nielsen et al, 2003, p.217)）。
- 4) 終幕：「すぐ二階へ戻った（考えただけで即、瞬間移動した）」。これも記述中に解釈が織り込んであるが、考えただけで瞬間移動する魔法というわけである。

II-4 夢分析第3ステップ：現象学的分析

いよいよ現象学的分析に入る。

ここでなぜ、フロイトやユングの深層心理学的分析でもなければ、脳科学に基づいた分析でもなく現象学的分析かという、「現象学とは、体験世界を、その内側に身を置いて観察し研究する学問」（渡辺、2016, p.13）だからだ。夢の意味を「解釈」したり脳科学的に「説明」したりするためには、どうしてもある程度は経験的な熟練や専門的な知識が要る。けれども、最初から解釈したり説明したりしようとすることは、現象学的には禁じ手なのだ。まず「夢」という体験現象を、ありのままに観察することから始めなければならない。この意味でも現象学は「手作りの科学」に親和

的なのである。

でも、どうやって「分析」するのか、夢をただ思い出して反芻したり、自分の夢記録を繰り返し読むだけで、分析ができるのか、と言われるかもしれない。実は現象学にも、単に観察しているだけでない独自の、現象学的分析の方法がある。ただし、それを解説するのは、現象学独自の用語と概念を使うことになるので、次のIII（理論編）に回すことにして、ここでは、夢の現象学に関して提案されている「夢世界の原理」（渡辺、2016、2018）を使って分析するのが夢の現象学的分析である、とだけ言っておこう。本稿独自の「夢世界の原理」を、表2として掲げておく。

夢世界の原理を使って分析するとは、夢世界の出来事を述べた「夢テキスト」から、表2の4つの原理によって、現実世界でならそうであったような「現実テキスト」を復元することに他ならない。現実テキストといってもそのような現実が別個にあるわけではなく、夢テキストから導かれるものなので、「心理的現実テキスト」と称しておく。表1の夢実例1でやってみよう。

- 1) 「二階寝室からT大キャンパスを眺めていた。」
夢世界の原理④が使える。私にはリタイア後の今でも、まるでキャンパスを見下ろしている位置に寝室があるかのようにT大での過去の研究生生活を身近に感じている」というのが心理的現実テキストとなる。
- 2) 「それとも階下へ行くべきかと考えた」→「すると、後者の考えが即、現実化し、階下へいった。」

表2 夢世界の原理

現実世界の意識と夢世界の意識の構造上の違いは、前者では意識構造が二重だったものが、後者では一重になるところにある。したがって――

- ①現実世界では、想起・予期・空想などの「思い浮かべる」意識は二重構造を備える。「思い浮かべられた当の対象像」と、「思い浮かべているに過ぎない」という暗黙の気づきと。夢世界ではこの暗黙の気づきが消滅して、二重構造が一重になるため、過去や未来や架空存在を思い浮かべると、「思い浮かべられた当の対象像」だけになってしまう。つまり、それらを「現に知覚し体験している」のと同じことになってしまう。
- ②現実世界での小説や映画の鑑賞も二重構造の意識を備える。現実ではたとえ『ハリー・ポッター』に夢中になっても「フィクションにすぎない」という暗黙の自覚がなくなることはない。夢では意識構造が一重なので自覚が失われ、現にハリー・ポッターとして魔法学校の授業を受けていたりすることになる。
- ③現実世界での反実仮想も夢世界では現実となる。「もしもアメリカに留学していたら今頃外資系で働いていただろうに」という思いは、夢では「もしも」「だろうに」が取れ、実際に留学して外資系で働いていることとして実現する。
- ④現実世界での「まるで……かのようだ」も、夢世界では「現に……である」となる。落ち込んだり舞い上がったりしても、現実には、まるで落ちこんだり舞い上がったりのかのようにであるに過ぎないが、夢では「まるで」も「かのよう」も取れて、現に落下したり空を舞ったりすることになる。

原理①が使える。すでに夢報告にこの解釈が織り込まれている。「それとも階下へ行くべきかと考え、結局階下へ行くことにして、階下へいった」というのが心理的現実テキストとなる。ちなみに表1で、トイレを寝室内で済ませてしまおうかと考えるのはおかしく思えるが、母が長くひとり暮らしをしていた実家では二階にも簡単なトイレがあり、泊まりに行った際にはどちらを使おうか迷うこともあったのだった。

3) 「階下へいった。母が起きていた。」

原理①より、故人が生きている夢は、単に原理①より、過去想起が知覚的現実化したとも解釈できるが、この場合は原理④より、「まるで母が今も生きているかのように」身近に感じている、ということだろう。

4) 「すぐ二階へ戻った（考えただけで即、瞬間移動した。）」

これも2)と同じく、階段を使って二階へ戻ったという事態が、夢世界の原理①によって瞬間移動になっているだけのことである。なお、補足するとこの家は筆者が高校まで住んでいた古い家で、母が物故して以後は住み手がいず、時々泊まりに行って管理に当たっているのである。

II-5 夢分析第4ステップ：夢の意味

こうして夢世界の4つの原理を逆に辿り、夢のテキストを「心理的現実テキスト」に変換することで、夢テキストの背後の夢の意味が、徐々に姿をあらわしてくる。上記の4つのテキストをまとめると、次のようになるであろう。

—私はリタイアしてかなり経つが、T大学での学生生活をまるで寝室から見下ろせる場所にあるかのように、今でも身近に感じている。また、母の生前に定期的に泊まりにいていた古い家に行って二階に泊まると、今でもまるで母が階下にいるかのような気がしている……。

これが、物語構造分析→異世界分析→現象学的分析により、夢テキストの背後の心理的現実テキストを総合することで浮かび上がってきた、夢の意味である。夢という表層のテキストの下の「深層のテキスト」といってよいかもしれない。夢分析とは深層のテキスト

を暴き出す作業のことなのである。これはフロイトやユングの深層心理学的夢分析と狙いは一致する（「テキスト」という語をフロイトやユングはここに挙げたような意味で自覚的には用いていないが、解釈学的現象学のリクール（Ricoeur, 2005/1970）は「精神分析が意識のテキストの下に解読するのはまさに別のテキストなのである」（p.381ff）と述べ、精神分析の作業は歴史文献学者が発見された文献を解読する作業に比較できるとしている）。分析方法が異なるだけである。

以上三段階の夢分析を総称して夢の物語論的現象学分析と名づける。

ここで、ユングの物語構造分析や異世界分析は分かるにしても、現象学的分析については、「夢世界の原理」は使ってみればなるほどと思っても、どのような経緯でこのような原理が現象学によって立てられるにいたったのか不明であるという疑問が出てくるであろう。この点を、夢の現象学の研究史を背景に明らかにするのが、次の理論編となる。

III 理論編 夢の現象学的分析とは何か

III-1 夢の現象学の過去

すでに述べたように現象学とは、体験世界を、その内側に身を置いて観察し研究する学問なのであった。だから、夢という内面的私秘的な現象となじみがよいように思われる。事実、夢の現象学関係で古典の位置を獲得した著作を挙げるのは、それほど困難ではない。日本にも紹介され、読まれてもいる主要な著作を初出の年代順にあげると――

ビンスヴァンガーの『夢と実存』（Binswanger, 2001/1947）、サルトルの『想像力の問題』（Sartre, 1955/1940）、メダルト・ボスの『夢——その現存在分析』（Boss, 1970/1953）、カイヨワの『夢の現象学』（Caillois, 1986/1956）、ウスラー（Usler, 1990/1964）の『世界としての夢』。

これらはいずれも、鋭い洞察をちりばめ該博な知識に裏づけられ、古典というにふさわしい書物である。ところが一方では、夢の現象学というテーマは「何人かの現象学者による断片的な探究をときおり成してき

たに過ぎない。現象学者たちは、夢見という心的状態について徹底的に研究するという課題を引き受けることはなかったのだ。その結果、現象学による夢見のいかなる系統的な考察も存在していない」(Zippel, 2016, p.194) という、現象学の研究史からの厳しい評言がある。この評に照らしてみれば、先の古典的著作群は、多くがハイデガーの影響で哲学的になりすぎているし、個性が強すぎて一代限りになってしまっていて、私たちが継承発展できるような夢分析の方法論を残してはいないことが分かる。

夢の現象学的分析法を系統的に展開するためには、夢の領域に留まらない現象学的心理学一般の展開の中から、私たちに継承発展可能な現象学的分析法の発展を跡付けて、それを夢研究に応用する、という順序で進むほかはない。

III-2 記述現象学的アプローチ

私たちに継承発展可能な現象学的分析法の流れは、すでに存在している。ジオルジ (Giorgi, 2013/2009) に代表される、心理学への記述現象学的アプローチがそれである。このアプローチの特徴は、現象学的還元と本質観取というフッサール現象学の方法論的二本柱に、できるだけ忠実であろうとしたところにある。

1) エポケーと現象学的還元

現象学的還元はエポケー (epoché) から始まる (フッサール, 2001b/1977)。これは判断を停止することという意味のギリシャ語から来ていて、「判断停止」と訳されている。つまり、あらゆる先入見を脇において、偏らない態度で現象それ自体に焦点を当てることである。どんな経験であっても純粋な現象とみなし、いかなる種類の説明や解釈への誘惑をも「かっこに入れ」、先入見なき偏らない態度でもって研究を始めなければならない。今まで、最初から夢を解釈したり説明を試みたりするのは現象学では禁じ手になると強調してきたのは、このことだったのである。現象学的心理学の研究実践ではエポケーは、主観的経験を記述したテキストを読む段階で、すでに始まっていると見なされる (Giorge, 2013/2009 ; Langdrige, 2016/2007)。テキストにどんな奇妙な体験が描写されていても、説明や解釈を控えてあるがままに受け取らなければならない。

このエポケーに続く現象学的還元の手続きはフッサールでもジオルジでもあいまいに留まっているが、後続の現象学的心理学者によって、すべての言明を最初は同等の価値を持つものとして扱うという「水平化」や、主題と関係ない言明や反復や重複の部分を除去するといった手続きがあげられている (Langdrige, 2016/2007 ; Moustakas, 1994)。これらの手続きは次の本質観取の過程と地続きといってもよいので、現象学的還元の核心はエポケーにあると覚えておいてよい。

2) 本質観取

「本質」は心理学ではなじみのない言葉であるが、ここでは、ジオルジや哲学者の西 (2019, p.272) の説明を勘案し、「ある体験がほかならぬその体験と呼ばれうるために備えていなくてはならない必要条件としての、体験の構造的不変項 (もしくはより簡略に、構造的特徴)」と定義しておく。本質観取の具体的方法としてフッサールは想像的変更を用いた。「三角形の本質とは何かを観取するのに、目の前に三角形を一つ描き、それを想像裏に変容させると、三つの辺のうちどれかが曲線になったり辺同士が交わる角に間隙ができたりしたら三角形という経験が成立しなくなることが分かる。だから三角形の本質とは三角形という経験が成立するのに必須の構造的特徴のことであり、三本の直線的線分で囲まれていて線分の終端同士がぴったり合わさっていること、となる」(渡辺, 2018, pp.70-71)。フッサールはただ一つの事例からでも想像的変更によれば本質は観取されとしたが、心理学研究としての現象学においては、複数データの比較が「事実上、標本収集による想像的変更である」(ラングドリッジ, 2016, p.26) とされる。

本質観取の具体的手順をできるだけ明示化することが、現象学を経験的心理学研究として発展させるためには重要である。ジオルジ (2013/2009) の工夫はこの点にあり、現象学的分析進行表を作成し、体験記述テキストをエポケーの態度で読むことから始めて、現象学的還元から本質観取の段階へと分析を段階的に進めて最終的に本質 (=その体験の構造的な不変項) を取り出せるという。ただしその分析過程は必ずしも分かりやすくはない。その点、シェフィールド学派と呼ばれる記述現象学の一派 (Ashworth, 2003) の方法が示唆的である。この学派では、ジオルジの方法では取り

出すべき体験の意味（＝観取すべき本質）が予め分からないのに対し、発見的手法（ヒューリスティック）として、晩期フッサール（フッサール, 2001a/1953）の生活世界論から生活世界の7つの条件（自己性、社会性、身体性、時間性、空間性、企図、言語）を、「人間的経験に基本的な本質的構造」（Ashworth, 2003, p. 146）とみなして抽出し、「主題分析」（Finlay, 2003, p. 112）に用いる。たとえば重大な疾患の診断を受けた人の生活世界が、以前と比べどのように変容したかを、7つの条件（＝主題）ごとに本人の自己記述を分析して明確にする（Ashworth, & Ashworth, 2003; Finlay, 2003, 等）。渡辺（2018）は、この主題分析の方法に示唆を受けて夢分析に用いるが、ただし、ヒューリスティックとしては生活世界の7条件ではなく、フッサールの志向性分類表を用い、フッサール志向性論に基づく主題分析と称した。次にこの方法を単に「夢の志向性分析」と名づけて略述する。

III-3 夢の志向性分析

志向性はフッサールがその師ブレンターノから受け継ぎ、現象学の基本着想としたもので、AをBとして経験するという意識の作用である（Spiegelberg, 2000/1994 参照）。たとえば会議の情景を思い浮かべる

のに、明日の予定として思い浮かべると「予期」という志向性になり、昨日あった教授会の光景として思い浮かべれば「想起」という志向性になる。遊びの中で子どもが自分を忍者として思い浮かべるならばそれは、「空想」という志向性である。想起や予期や空想に共通の、「現にない対象を現にあるもののように思い浮かべる」という種類の志向性をフッサールは「準現在化」と呼び、「現にある対象の知覚」の方は「現在化」と呼ぶ。それに他者経験という独自の志向性の領域を加えると、志向性は現在化、準現在化、向現前化に三大別される（表3）。

ここで現在化と準現在化を比較すると、後者の本質（＝構造的不変項）が、対象を思い浮かべると同時に「思い浮かべているに過ぎない」と自覚しているという二重の意識にあることは、フッサール（Husserl, 1980）、ベルネ（Bernet, 2004）、ドゥ・ウォレン（de Warren, 2009/2009）らの精緻な現象学的考察によって明らかにされてきたところである（向現前化の場合は三重の意識になって実在他者への変身夢の場合に問題になるが、本稿ではそのような事例がなく紙数の余裕もないので省略した。詳しくは渡辺（2018）参照）。

この志向性分類表を用いて夢体験と現実体験を比較すれば、問題となっている夢体験の本質をなす志向性の構造が観取されると渡辺（2016, 2018）はいう。実

表3 フッサールの志向性分類表（渡辺,2018,p.74,表1を改変）

志向性の種類	意識の様相	解説
現在化（Gegenwärtigung）	知覚	対象が直接現れる直観的体験。想起や予期、空想が対象を準現在化するのに対し、対象を生身のありありとした仕方での現在化する。
準現在化（Vergegenwärtigung） ドイツ語は元々「思い浮かべる」という意味。	知覚以外	現に今それと相対していないような対象を思い浮かべる作用。
（定立的）準現在化：準現在化の中でも、空想と異なり、存在した・している・するだろうと確信を以って思い浮かべることが、特に定立的準現在化。	予期	たとえば明日予定されている会議の光景を思い浮かべる等。
	想起	たとえば昨日のコンサートの情景を思い浮かべる等。
	現在想起	外から家の内部を思い浮かべる場合のように、実際に知覚することなくして、現在存在しているものとして思い浮かべる。
（非定立的）準現在化：準現在化の中でも、空想のように、実在の信念なく思い浮かべること。	空想	一角獣のような虚構の対象を思い浮かべる等。
	記号／像意識	読書等で文字のような記号を介して虚構の中に入り込む。／絵のある人の肖像として見る（画像であって実物でない以上、モデルの実在非実在にかかわらず非定立的）。
向現前化（Appräsentation）	他者経験	他者を他の主観として経験すること。

際に、筆者自身の夢日記ブログから例を取り出して、夢体験と現実体験の比較に基づく志向性分析を行ってみる(表4。IIとIVでの「最近の夢」シリーズの事例とは別の事例を、例示に最適になるような「典型例」として用いた)。

上段夢事例テキストを、現実の状況→夢内容→付記、という三部分に分かれるように記したが、現実の状況も付記もこのままでは読者には情報不足なので補足

ると、ゲーテ・インスティテュートとは、東京・赤坂にあるドイツ政府肝いりの日独文化交流機関。筆者はドイツ語会話を学ぼうと数日前に訪ね、途中からの編入には筆記とドイツ人との会話からなるレベルチェックを受けなければならないと、受付の窓口で日本人スタッフに説明を受け、レベルチェックの日程を予約して来たのだった。

次に、渡辺(2018)が、ジオルジに学んで現象学的

表4 「明後日の予定が実現している夢*」とその現象学的分析段階進行表

〈現実の状況〉				
2015年10月26日。ゲーテ・インスティテュートで明後日に受ける予定のレベルチェックを受けている夢を見た。				
〈夢内容〉				
まず、受付に行って、窓口でスタッフと話す。日本人だったかな。隣の窓口でも、他の人が、同様なやり取りをしていた。その後、相手が通路まで出てきて、四角で囲んだ5の数字の記してある紙片を渡す。「パーフェクトです」と言う。それも、A2のレベルだという。会話はまったくダメなはずなのに、不相応に高いレベルに編入では困った、と思った。聞き取れなくとも相手のみぶりで分かってしまった、ということなのだろうか。				
隣の人は、「2」らしい。これが、筆記テストらしい(などと、筆記をした覚えもないのに、考えた)。				
次にドイツ人と会話するテストだ。窓口で相手をした、私の担当の日本人スタッフが、ドイツ人を探しに行く。先刻の窓口カウンターの内側で、何かやっているドイツ人に、「ちょっと」といった感じで合図をする。ドイツ人が通路に出てくる。とりあえず、「Guten Tag」と言おうかな、などと思っているうちに目が覚めた。				
〈付記〉				
ちなみに、気が変わってレベルチェックには行かなかったのが、予知夢にはならなかったらしい。				
段階				
I) 夢テキストの原文をエポケーの態度をもって読む。	III) 現象学的還元(主題と関係ない言明や反復や重複の除去)によって得られた夢テキスト。	IV) 夢テキストに対応する心理的現実テキスト。想像的変更によって夢テキストから生成。	V) 表3に基づきIIIとIVの志向性の構造を比較。	
II) テキストを意味的に分節する(枝葉の部分は省略)。				
まず、受付に行って、窓口でスタッフと話す。日本人だったかな。(略)。	私はレベルチェックを受けるためゲーテ・インスティテュートに行き、窓口の日本人とやり取りをすると、チェックの結果らしき紙片を渡される。	明後日にゲーテ・インスティテュートでレベルチェックを受ける予定である。まず筆記テストがあるらしい。	IVでの未来企画・予想(=予期)がIIIで「現実の知覚体験」として実現している。つまり、IV:準現在化・予期, III:現在化・知覚	
その後、相手が通路まで出てきて、四角で囲んだ5の数字の記してある紙片を渡す。				
「パーフェクトです」と言う。それも、A2のレベルという。	いつのまにか筆記テストの結果が出て、会話能力に比べて不相応に高いレベルに編入されそうになって困っている。	筆記テストの結果が良く、会話能力に比べて不相応に高いレベルに編入されたら困ると思う。	IVでの懸念(=予期)が、IIIでは「現実の知覚体験」として実現している。IV:準現在化・予期, III:現在化・知覚	
会話はまったくダメなはずなのに、不相応に高いレベルに編入では困った、と思った。(略)隣の人は、「2」らしい。これが、筆記テストらしい(略)。				
次にドイツ人と会話するテストだ。(略)ドイツ人が通路に出てくる。とりあえず、「Guten Tag」と言おうかな、等と思っている。	ドイツ人と会話テストで対面している。	ドイツ人と会話テストで対面することを予想している。	IVでの予期が、IIIでは「現実の知覚体験」として実現している。IV:準現在化・予期, III:現在化・知覚	
段階VI) 全体のまとめとしての本質観取。全てにわたって、IV:準現在化・予期, III:現在化・知覚、の対比が見られる。すなわち現実の体験では準現在化・予期であるものが、夢世界では現在化・知覚として現れる。				

*:引用元は「付記・謝辞」参照。

分析段階進行表を使って行っている分析法にならって、表4で分析を試みる。

ここで、段階Ⅲで得られた夢テキストの志向性構造を、表3に基づいた志向性分析で識別するのが本質観取に当たるが、夢の現象学的分析の特異性は、現実世界と比較しつつ本質観取を行うところにある。その体験を夢体験として成り立たせている必須の構造を抽出するには、現実体験と比較しなければならないからである。そのため、段階Ⅳをおいた。「心理的現実テキスト」とあるのは、夢体験を記述した「夢テキスト」と比較するためのテキストであり、渡辺(2018)を参考にするならばこのテキストは、夢テキストを、夢を見た時点つまりレベルチェックテストを明後日に控えて現実に体験したであろう形に変換することで得られる。段階Ⅵは本来表の右端に位置するが、便宜上最下段に置いた。

Ⅲ-4 夢世界の原理

この表4の夢事例は明後日という近未来を夢見た例であるが、段階Ⅵで述べたように、現実体験では「準現在化・予期」という志向性構造であるはずのものが、夢体験では「現在化・知覚」として現れている。同様に、過去を夢見たり、架空存在を夢見たり、小説の中の世界を現実として夢見たりする事例を志向性分析することによって、次の「夢世界の原理」に到達した、と渡辺(2016)は言う。

「現実世界では、想起・予期・空想などの『思い浮かべる』志向的意識は二重構造を備える。『思い浮かべられた当の対象像』と、『思い浮かべているに過ぎない』という暗黙の気づきと。夢世界では、この暗黙の気づきが消滅して、二重構造が一重になる。ゆえに、過去や未来や架空存在を思い浮かべると、『思い浮かべられた当の対象像』だけになってしまう。つまり、それらを『現に知覚している』のと同じことになってしまう」(渡辺, 2016, pp.41-42)。

ちなみに現実世界での想起・予期・空想などの「思い浮かべる」志向性は、表3(志向性分類表)では「準現在化」としてまとめられているが、「準現在化」という志向的意識が、「現在化」と異なり二重構造を備えるというのは、前述したように、フッサール(Husserl, 1980)、ベルネ(Bernet, 2004)、ドゥ・ウォ

レン(2009)らの精緻な現象学的考察によって明らかにされてきたところである。

Ⅲ-5 夢世界の原理の拡張

——レイコフのメタファー論

この渡辺(2016)版「夢世界の原理」と、本稿Ⅱ部で夢の現象学的分析に用いた表2(夢世界の原理)を比べると、名称も同じで前半では内容もほぼ一致するのに、新しい項目が付け加えられていることに気づく。まず、表2の①は渡辺版そのままである。②も表3(志向性分類表)中の「記号/像意識」に基づいたものだし、③の反実仮想も、「思い浮かべる」という志向性の二重意識が一重になることとして、たやすく理解できる。ところが④はそうはいかない。例にある「落ち込む」「舞い上がる」のような感情の状態で、予期や想起や空想など「思い浮かべる」場合のような志向性意識の二重化がはっきり認められるだろうか。

ここで、これら例に出した表現は、レイコフら(Lakoff & Johnson, 1986/1980; Lakoff, 1997) 認知言語学の一部の立場では、人間の根本的な認知方式のひとつと見なされている概念メタファーであることに気づく。概念メタファーは、単に言語の問題にとどまるというよりも、もっと根源的で、空間の中に身体を持って生きている人間が世界を把握しようとする時に避けることのできないカテゴリー把握の作用・原理なのだと考えられている。根源メタファーともいう。単に感情状態を把握する場合だけでなく、「責任を担う」「話が通じる」等のように、多少なりとも抽象的な世界把握には欠くことができない。抽象的で捉えどころのない体験を把握するのに、重い荷物を担うことや相手との間の導管に流体が流れるような具体的なこと「として」把握する事態が、これら表現に込められている。ここには、表3の「準現在化」(想起や予期や空想)のような明示的な二重志向性構造でなくても、体験における何らかの志向的構造を認めざるを得ないであろう。レイコフ自身、メタファー論を夢の解釈に適用する試みを示しているし(Lakoff, 1993, 1997)、夢分析におけるメタファー論と精神分析の統合の試みもあらわれている(Bolognesi, & Bichisecchi, 2014)。現象学とメタファーと題した研究はあっても(たとえば Theodorou, 2013; 滝浦, 1988)、夢分析におけるメタ

ファー論と現象学の統合の試みはまだ現れていないようであるが、本稿の試みを不十分ながらその嚆矢とすることで、今後の研究への促しとしたい。それが、表2における「夢世界の原理④」である。現実体験としてはある心の状態を「舞い上がる」こととして把握したのだが、現実には舞い上がっているわけではないという志向的意識が伴って二重構造になっている。夢ではこの「わけではない」が取れて一重になるために、文字通り舞い上がることになってしまうのである。

ここで、夢世界の「原理」とはどのような意味だろうか。夢分析のような経験的研究ではアプリアリな原理はありえないが、といて自然科学研究の意味での「仮説」でもないことに留意しなければならない。現象学では仮説を作らないからだ（西，2001）。従ってこれら4つの「原理」とは、夢体験と現実体験の差異の「本質」の、最初の観取であることになる。自然科学（的心理学）のような、仮説構成→演繹→観察による検証/反証という過程では、仮説と観察は互いに独立している（Hanson, 1986/1956の観察の理論負荷性の指摘も相互独立の建前を前提している）。ところが現象学において体験→本質観取の過程では、そのような独立性がない。したがって最初の体験データで観取された本質が後のデータによって訂正されることがあっても、仮説の交代とは違う。当初は気づかなかった重要な構造的特徴が浮上して最初の構造的特徴が目立たなくなるなどして、より精緻化されるということなのである。次のIVでのシリーズ分析も、夢世界の原理の検証/反証ではなく、精緻化をめざすものとして捉えなければならない。

IV 実践応用編 夢の物語論的現象学分析の続き

IIで述べたように、本稿の元になる着想を得た日から遡って夢日記サイトに記録されていた5つの夢事例を、「最近の夢」シリーズとして実践編II・IVで分析対象とする予定であったが、スペースの都合で5番目の最も新しい夢事例は省略せざるを得なかった（表1）。元々、手作りの夢研究の実践例として5事例というのは、初心者でも可能な限度といった意味以上のさしたる根拠があるわけではないので、4事例になって

も特に問題はないと思われる。以下、サンプリングの恣意性という批判を避けるため、表1の残る3事例を夢事例1に続けて機械的に日付順に分析してゆく。ただし、現象学的分析ではどこから始めても同じ結果がでると言われており（渡辺，2018）、初心者の場合は分析しやすい夢から始めても構わないと思われる。

IV-1 表1 夢事例2

「海の彼方からの侵略で逃げ惑う夢」

夢の物語構造分析

- 序幕（提示） 海のそばに建つ大きなマンションのような建物の中に、たぶん十人前後の仲間たちといった。
- 第二幕（展開） 何が海の彼方から侵略しに来る～建物の内部をにげまどっていた。宇宙人かも～私たち以外の人々は、知らないようだった。
- 第三幕（クライマックス） マンションも危なくなったので、～窓の中に、所員らしき人影が、デスクワークにいそんでいるのが見えた。
- 終幕（終結） と、警戒音が鳴り響く。とはいえ、研究所の中の人々に目立った動きはないので、無視して敷地を突っ切る。

夢の異世界分析

- 序幕 現実には覚えがないが、あったかもしれない。
- 第二幕 宇宙人かもしれない何が海の彼方から侵略しに来ることを知っているのは「私たち」だけ。現実にはありえない空想的設定。
- 第三幕。第二幕からの流れとしてはあり得る展開。
- 終幕。第三幕の流れとしてはありうる展開。

夢の現象学的分析

第二幕について表2「夢世界の原理」①と④を適用する。①から、「宇宙人かもしれない何が海の彼方から侵略しに来ることを知っているのは「私たち」だけ」と空想した。④から「あたかも宇宙人のような何が彼方から侵略しに来るかのようには私はこの世界を感じている。しかもこの脅威を知っているのは「私たち」だけ」という孤立感がある。

第三幕、終幕。第二幕からの流れとして自然の展開なので、第二幕で設定された世界観の延長として捉え

られる。

夢の意味——深層のテキスト

第二幕に集約される——私は「宇宙人かもしれない何か海の彼方から侵略しに来るらしい。このことを知っているのは「私たち」だけなのだ」と空想する。それは「あたかも宇宙人のような何か彼方から侵略しに来るかのようには私はこの世界を不安定に感じていて、しかもこの脅威を知っているのは「私たち」だけという孤立感がある」からである。

IV-2 表1 夢事例3「赤茶けた雄大な風景」

夢の物語構造分析

- 序幕 S君が出てきて、何か話したような気がするが、はっきりしない。とにかく、自然の風景の中を、自転車を走らせているのだった（友人が出てくる前半は別の夢かもしれないが、便宜上ここにまとめておく）。
- 第二幕 山腹のようなところで、町に向かって行くつもりだったが、ある道を選んで行くと、さらに二股に分かれる。その左側を行くと、どうやら道を誤ったらしく、大きな谷間に沿って道は少しずつ登り坂になっている。
- 第三幕 これでは町とは反対方向になってしまう。／大きな谷の、赤茶けた雄大な風景がひろがる。
- 終幕 すると、Y先生がスマホに電話してくる。C市と連絡が付いたから、話してみるか、とのこと（この辺、電話の相手のY先生が、直接出てきたような気がする）。道に迷っているので助け舟を出してくれるだろう、という意らしい。Y先生は政治力があるから、可能かもしれない。ユングによると、「終結」とは解決もしくは破局のことだというのが、ここはかなり綺麗な「解決」になっている。

夢の異世界分析

- 序幕 「S君が出てきて、何か話したような気がするが、はっきりしない」。大学時代の友人で九州在住。長く病気療養中ということで50年近く会っていないが、最近手紙のやり取りをしている（彼はパソコンを持っていない）。現実には会う可能性のない遠方の友人と話していたところに異世界性がある。

- 序幕の後半から第二幕～第三幕にかけて。見たことのない風景の中、自転車で道に迷っている。山中で道に迷ったことはあるが、自転車でではない。「大きな谷の、赤茶けた雄大な風景がひろがる」には非現実感がある。
- 終幕 現実にはあり得ないと思うが、Y先生ならいかにもやりかねないと思わせる状況だ（という想像を支える現実の出来事も連想されるが、プライベートに亘るので省略する）。

夢の現象学的分析

- 序幕 S君とは手紙のやり取りをしていて、まるで実際に話しているかのように、心の内でも対話している。
- 序幕の後半から第二幕～第三幕。まるで見知らぬ雄大な風景の中で迷っているちっぽけな存在のように自分を感じている。
- 終幕 世間通で政治力もある人物を頼りにしたく思うところがある。

夢の意味——深層のテキスト

序幕のS君のくぐり度は前の（別の）夢に属するものとみなして省略する。夢の意味はこうだと思われる。——私は見知らぬ光景の中に迷い込んだように世界と自分とを感じているが、反面、世間通で政治力のある人物を頼りにしたく思っている。

IV-3 表1 夢事例4「子犬が蟬になる夢」

夢の物語構造分析

- 序幕 子犬のような何かと友だちになったのだった。
- 第二幕 そのうち、その何かは、ビニール製の犬小屋のような中に籠ってビニール製の壁にくっつき（図省略）、「アリガトウ」と呟く。そして、動かなくなった。蛹になりつつあるのが分かった。
- 第三幕 背中がしだいに割れて、巨大な蟬が姿を現す。
- 終幕 その後、蟬は、飛んで行ったわけではなく、ペット屋みたいなのがいて、そこに貰われて行った。夢はまだ終わっていないが、これだけで4幕構造として完結している。だから、「そこに、妻が戻ってくる」のくぐり度は、別の物語のようで、そこにも4幕構造が

見て取れるように思われる。

- 序幕 そこに、妻が戻ってくる。
- 第二幕 せっかくの脱皮の場面は見なかったのだが、何か言った。
- 第三幕 私は、これがそうだと、ペット屋の屋台のようになった店先を指差す。
- 終幕 このあたり、店先の光景は、記憶が薄れてぼんやりしているのか、それとも元々ぼんやりした光景なのかは分からないが、はっきりしない。後者かもしれない。夢の中で、随分ぼんやりしてるな、と思ったことを覚えているような。

このように構造化してみると、後の物語の中で前の物語が話題にされているという、入れ子構造が認められる。ただし現実には劇であるように前の物語は単に話題にされただけではなく、後の物語よりもむしろ追真的に体験していると感じられる。かえって後の物語は、「夢の中で、随分ぼんやりしているな、と思った」とあるように、夢の映像を半分醒めた意識で評価しているようなところがあり、追真性が薄れている。

夢の異世界分析+現象学的分析

煩瑣なので二段の分析を一段にまとめる(元々、異世界分析を現象学的分析の予備段階として位置づけることも可能であった)。

前の物語について。

- 序幕～二幕～三幕～終幕 「子犬のような何か」→「蛹」→「蟬」→「ペット屋に貰われていく」という推移。連想すれば以下のように背景となる物語が見えてくる。
- 第二幕「子犬のような何かは「アリガトウ」と呟くと……」は、『涼宮ハルヒの消失』の中でヒロインの長門有希が、ありがとう、と主人公のキョンに言う最後の場面を連想させる。
- 第三幕 巨大な蟬は、同じシリーズの「エンドレスエイト」の中で、等身大のセミが恩返しに来て戸口にいるのを想像して気分が悪くなった、というキョンの語りを連想させる。「涼宮ハルヒシリーズ」の世界観が背景にあると分かってくる。そうすると「子犬のような何か」も、シリーズの初期のエピソードで、サークル活動で長門有希とペアで市中探索をすることになったキョンが「行くか」／歩き出すとついてくる。だんだんとこいつの扱いにも慣れて

きた」(谷川, 2003, p.155)という場面を連想させる。宇宙人妄想に囚われている無口で無表情の少女と思ったのだが、キョンに対しては従順なのである。そこから、「子犬のような何か云々」は、子犬のような長門有希が巨大セミのように恩返しに来て、「アリガトウ」と呟く、というように、涼宮ハルヒシリーズの世界観を踏まえたメタファーと解し得ることが分かって来る。

後の物語について。一転して現実に入りうる話になる。空想的な物語は妻への話の中に入れ子になり、証拠として「これがそうだと、ペット屋の屋台のようになった店先を指差す」が、「店先の光景は、記憶が薄れてぼんやりしているのか、それとも元々ぼんやりした光景なのかは分からないが、はっきりしない」ともはや証拠として機能しなくなっている。

夢の意味——深層のテキスト

思いきってまとめる。「涼宮ハルヒシリーズ」での、(一人称で語る)主人公キョンとヒロインの一人長門有希との(実際の物語では長門有希の悲恋に終わった)恋物語を、現実には体験したかのように感じていて、それを妻に話す。けれど、その現実性を証拠立てることができないでいる。

これらの夢分析事例で最後に導き出される夢の意味は、「仮説」のように響くかもしれない。たとえばホールのシリーズ分析では、夢分析は一人について10以上のシリーズについてなされるのがよいとされる(Hall & Van de Castle, 1966)。それは、最初の方の夢で作られた仮説(たとえば、嵐の海を小舟で漂うといった舞台背景は、世界と人生をそのように感じていることの具象化)が、後の方の夢で検証・反証される可能性があるからである。けれどもIIの末尾で論じたように、現象学では仮説を作らない。ここに抽出された夢の意味とは、ある夜のある状況で見られた特定の夢という「視点」を通して見られた「心理的現実」であって、検証/反証されるべきものではない。より多くのデータに接することは、より多面的な視点を通して眺めることで、最初の洞察が精緻化されていくという過程であって、仮説→検証の過程とは異なる。

V 考察と結論

「手作り」であっても「科学」を自称する以上、現代科学の体系と矛盾するものにはしたくない。序論で一瞥したように夢科学に関しては複数の理論の競合状態にあるが、ここでは、それらの理論の中でも新顔で、現代の認知神経科学の最前線をフォローしていると思われる、夢の神経認知説を取り上げる(Domhoff, 2001, 2019)。この説の近年の理論的発展によれば、夢とは心のさ迷い歩き (mind wandering) の具象化であり誇張である、というものになるという(Fox, Nijeboer, Solonolova, Domhoff, & Kristoff, 2013)。心のさ迷い歩きとは、私たちが何もしていない時には脳は何をしているのか、という脳科学の問題意識からクローズアップされた概念である (Mason, Norton, Van Horn, Wegner, Grafton, & Macrae, 2007)。近年の研究では (例えば Corballis, 2015/2014; Grunberger, Ben-Simon, Levkovitz, Zangen, & Hendler, 2011; Andrews-Hanna, Smallwood, & Spreng, 2014)、特に意識的な作業をしていない、何もしていないでボーッとしている状態 (default mode) の方が広範囲に脳が活動しており、その活動ネットワークを脳のデフォルトモード・ネットワーク (DMN) という。また、実験参加者にランダムな時刻に合図を入れて考えていることを報告して貰うという方法では、何もしていない状態では絶えず、未来を予想したり過去を思い返したり、白昼夢に耽ったりという、心のさ迷い歩きの状態にあったという。この知見を受けて夢の神経認知説では、「夢見とは覚醒時の MW (mind wandering) の強調版 ('intensified' version) であり」(Fox et al., 2013, p.1)、「レム睡眠時の精神活動は多くの面で、自然発生的な思考と白昼夢の、より長く、没入状態にある (immersive)、そしてより強調された (more intensive) ヴァージョンである」(Fox et al., 2013, p.11) という。

ここで、「強調された」や「没入状態にある」といった漠然たる言い方がなされているが、本稿での夢の志向性分析を用いればより具体的に説明できるのではないだろうか。すなわち、現実世界での予期や想起や空想や読書体験が、夢世界では現に知覚し行動しているという直接の体験へと変容する。これが、「強調され

た」「没入状態にある」ということの、より具体的に明確な説明となるのではないか。この意味で、夢の物語論的現象学分析は、神経認知説に代表される夢の認知神経科学と、相互補完的な関係にあると思われるのである。

ここで、手作りの科学は確固たる専門領域と専門家の存在を前提しないというが、本稿の夢の物語論的現象学分析では、「夢世界の原理」は専門領域であって「理論編」が必要になっている以上、完全に自律的な手作りの科学としての夢研究は無理なのではないか、という疑問が起こるかもしれない。けれどもユングの物語構造分析にしても、アリストテレスまで遡っての物語論に非専門家が容易に関われない以上は、夢研究者としての私たちがエンドユーザーにとどまってしまうことは、夢世界の原理と事情は同様なのである。同じようにエンドユーザーになってしまうにしてもユングが問題視されず現象学が問題になるとすれば (と想像されるのであるが)、前者が夢分析の世界で定評を得ているのに対し後者は新参者であるというところにあるのではないか。このギャップを埋めるためにも、本稿ではIII理論編で現象学分析を理論的に展開することで、定評を得ることに努めたのであった。また、そもそも夢研究にあっては、専門家と非専門家の区分は絶対的なものではないとも思われる。夢データネットワークによって、非専門家研究者であっても他の研究者の分析法から学び、相互批判を通じて分析法を深めることができよう。特に本稿で十分明示化できなかった、現象学的分析→夢の意味という過程を、実例を重ねることで精緻化することも、非専門家研究者に期待されることである。夢世界の原理やユングの物語構造分析にしても、専門家から一方的に与えられるに終わらずに、分析の実践の中でより精緻化を図ることが可能になるかもしれない。

最後に、夢の現象学的分析だけを扱っておけば本稿はより学術的になったのではないかという、ありうる疑問に答えておきたい。そもそも、現象学的な質的研究では、「なんのために」という動機の意識化・明記は欠かすことができない (たとえば, Langdridge, 2016/2007, 第5章参照)。筆者が手作りの科学という文脈での夢分析を構想したきっかけは、本稿で土台の一つとしている渡辺 (2016, 2018) の夢の現象学では、夢の意味よりも夢の現象学的構造の解明に焦点が置か

れ、本稿でいう志向性分析に留まっていることに疑問を覚えたところにある。渡辺の問題意識は現象学の専門家として夢の現象学を展開するところであり、夢の意味という素朴な問いは二の次になってしまっているのではないか。また筆者は対人支援系の仕事に就いているわけではないので、夢分析をセラピーに役立てるといった動機にも乏しい。それゆえ本稿では、夢の意味を知りたいという素朴な問題意識に立ち返って手作りの科学を構想したのだった。その結果、ユングの物語構造分析やポップカルチャーからの異世界分析を取り入れることによって、夢の意味にまで迫ることのできる物語論的現象学分析の構想を打ち出せたのだった。手作りの科学としての夢研究という枠組みは、夢の物語論的現象学分析にとって外すことはできないと思われる。

2050年にはほとんどの仕事でAI（人工知能）が人間に取って代わり、僅かに対人ケアと創造性の分野だけが残されるというのは、最近よく耳にする議論である（たとえば Harari, 2019/2018）。本稿はその創造性の分野で芸術的創作と双璧をなす科学研究に焦点をあて、「手作りの科学としての夢研究」という新しい科学の形を構想することで、来るべき世界に備えることにも貢献できればと願っている。

引用文献

- Andrews-Hanna, J. R., Smallwood, J., & Spreng, R. N. (2014) The default network and self-generated thought: Component processes, dynamic control, and clinical relevance. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1316, 29-52. doi: 10.1111/nyas.12360
- Ashworth, P. (2003) An approach to phenomenological psychology: The contingency of the lifeworld. *Journal of Phenomenological Psychology*, 34 (2), 145-156.
- Ashworth, A. & Ashworth, P. (2003) The lifeworld as phenomenon and as research heuristic, exemplified by a study of the lifeworld of a person suffering Alzheimer's disease. *Journal of Phenomenological Psychology*, 34 (2), 257-278.
- Bernet, R. (2004) *Conscience et existence: Perspectives phénoménologiques*. Paris: P. U. F.
- ビンズヴァンガー, L. (2001) 夢と実存 (新装版) (荻野恒一・中村昇・小須田健, 訳). みすず書房. (Binswanger, L. (1947) *Traum und Existenz*, *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Bd. I*. Bern, Switzerland: Francke Verlag. Originally published in 1930.)
- Bolognesi, M., & Bichisecchi, R. (2014) Metaphors in dreams: Where cognitive linguistics meets psychoanalysis. *Language and Psychoanalysis*, 3 (1), 4-22.
- ボス, M. (1970) 夢——その現存在分析 (三好郁男・笠原嘉・藤縄昭, 訳). みすず書房. (Boss, M. (1953) *Der Traum und seine Auslegung*. Bern: Verlag Hans Huber.)
- カイヨワ, R. (1986) 夢の現象学 (金井裕, 訳). 思潮社. (Caillois, R. (1956) *L'incertitude qui vient des rêves*. Paris: Gallimard.)
- コーバリス, M. (2015) 意識と無意識のあいだ——「ぼんやり」したとき脳で起きていること (鍛原多恵子, 訳). 講談社 (講談社ブルーバックス). (Corballis, M. C. (2014) *The wandering mind: What the brain does when you aren't looking*. Chicago: University of Chicago Press.)
- ドゥ・ウォレン, N. (2009) 夢, 悪夢, そして自己覚知 (村田憲郎, 訳). 現代思想12月臨時増刊号, 37-16, 90-101. (de Warren, N. (2009) *Dreams, nightmares and self-awareness*. Unpublished.)
- Domhoff, G. W. (2001) A neurocognitive theory of dreams. *Dreaming*, 11, 13-33.
- Domhoff, G. W. (2019) The neurocognitive theory of dreams at age 20: An assessment and a comparison with four other theories of dreaming. *Dreaming*, 29, 265-302.
- Finlay, L. (2003) The intertwining of body, self and world: A phenomenological study of living with recently-diagnosed multiple sclerosis. *Journal of Phenomenological Psychology*, 34 (2), 157-179.
- Fox, K. C. R., Nijeboer, S., Solonolova, E., Domhoff, G.W., & Kristoff, K. (2013) Dreaming as mind wandering: Evidence from functional neuroimaging and first-person content reports. *Frontiers in Human Neuroscience*, 7, 1-18. doi: 10.3389/fnhum.2013.00412
- フロイト, S. (2007-2011) 夢解釈 I・II (新宮一成, 訳) (フロイト全集4, 5) 岩波書店. (Freud, S. (1942) *Gesammelte Werke, II/III, Die Traumdeutung, herausgegeben von Anna Freud et al*. London: Imago Publishing.)
- 伏瀬 (2014-2019) 転生したらスライムだった件 (1-16巻). マイクロマガジン社 (GC NOVELS).
- ジョルジ, A. (2013) 心理学における現象学のアプローチ——理論・歴史・方法・実践 (吉田章宏, 訳). 新曜社. (Giorgi, A. (2009) *The descriptive phenomenological method in psychology: A modified Husserlian approach*. UA: Duquesne University Press.)
- Gruberger, M., Ben-Simon, E., Levkovitz, Y., Zangen, A., & Hendler, T. (2011) Towards a neuroscience of mind-

- wandering. *Frontiers in Human Neuroscience*. 5, 56. doi: 10.3389/fnhum.2011.00056
- Hall, C., & Van de Castle, R. (1966) *The content analysis of dreams*. New York: Appleton-Century-crofts.
- ハンのアニメ雑談(2018年3月10日) 2018年に思う異世界転生物の今昔。終わらない自分探しと承認欲求, なんか不安でも面白く感じちゃう。 <https://ch.nicovideo.jp/hern/blomaga/ar1391371> (情報取得 2020/4/21)
- ハンソン, N. R. (1986) 科学的発見のパターン (村上陽一郎, 訳). 講談社 (講談社学術文庫). (Hanson, N. R. (1956) *The Patterns of discovery: An inquiry into the conceptual foundations of science*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- ハラリ, Y. N. (2019) 21 lessons ——21世紀の人類のための21の思考 (柴田裕之, 訳). 河出書房新社. (Harari, Y. N. (2018) *21 lessons for the 21st century*. NY: Spiegel & Grau.)
- 平川秀幸 (2010) 科学は誰のものか——社会の側から問い直す. NHK 出版 (生活人新書).
- フッサール, E. (2001a) ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 (細谷恒夫・木田元, 訳). 中央公論社 (中公文庫). (Husserl, E. (1953) *Die Krise der Europäischen Wissenschafts und transzendental Phänomenologie*. In W. Wiesel (Ed.), *Husserliana VI*. The Hague: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (2001b) デカルト的省察 (浜渦辰二, 訳). 岩波書店 (岩波文庫). (Husserl, E. (1977) *Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie*. Hamburg: Felix Meiner.)
- Husserl, E. (1980) Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung. Zur Phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigung. In E. Marbach (Ed.), *Husserliana XXIII*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Jung, G. C. (1974) *Dreams: From the collected works of C.G. Jung, vols. 4, 8, 12, 16*. Trans. R. F. C. Hull. Princeton U. P.
- ユング, G. C. (2016) ユング夢分析論 (横山博, 監訳・大塚紳一郎, 訳). みすず書房. (Jung, G. C. (1931) *Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse*; Jung, G. C. (1916/1928/1948) *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes*; Jung, G. C. (1945/1948) *Vom Wesen der Traume*; Jung, G. C. (1909) *L'analyse des rêves*; Jung, G. C. (1910/1911) *Ein Beitrag zur Kenntnis des Zahlentraumes*; Jung, G. C. (1961/1977) *Symbols and the interpretation of dreams*.)
- Kilroe, P. A. (2000) The dream as text, the dream as narrative. *Dreaming* 10, 125-137.
- Lakoff, G. (1993) How metaphor structures dreams: The theory of conceptual metaphor applied to dream analysis. *Dreaming*, 3, 77-98.
- Lakoff, G. (1997) How unconscious metaphorical thought shapes dreams. In D. J. Stein (Ed.), *Cognitive Science and the Unconscious* (pp.89-119). Washington DC: American Psychiatric Press.
- レイコフ, G.・ジョンソン, M. (1986) レトリックと人生 (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸, 訳). 大修館書店. (Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.)
- ラングドリッジ, D. (2016) 現象学的心理学への招待——理論から具体的技法まで (田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子, 訳). 新曜社. (Langdrige, D. (2007) *Phenomenological psychology: Theory, research and method*. Pearson/Prentice Hall.)
- Mason, M. F., Norton, M. I., Van Horn, J. D., Wegner, D. M., Grafton, S. C., & Macrae, C. N. (2007) Wandering minds: the default network and stimulus-independent thought. *Science* 315, 393-395.
- Moustakas, C. E. (1994) *Phenomenological research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- ニールセン, M. (2013) オープンサイエンス革命. (高橋洋, 訳), 紀伊国屋書店. (Nielsen, M. A. (2012) *Reinventing discovery: The new era of networked science*. Princeton, N.J. Princeton University.)
- Nielsen, T. A., Zadra, A., Simard, V., Saucier, C., Stenstrom, P., Smith, C., & Kuiken, D. (2003) The typical dreams of canadian university students. *Dreaming* 13 (4), 211-235. doi: 10.1023/B:DREM.0000003144.40929.0b.
- 日本心理学会倫理委員会 (編) (2009) 日本心理学会倫理規定. 日本心理学会.
- 西研 (2001) 哲学的思考——フッサール現象学の核心. 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- 西研 (2019) 哲学是对話する——プラトン, フッサールの〈共通理解をつくる方法〉. 筑摩書房 (ちくま選書).
- リクール, P. (2005) フロイトを読む——解釈学試論 (久米博, 訳). 新曜社. (Ricoeur, P. (1970) *De l'interprétation. Essai sur Freud*. Paris: Éditions du Seuil.)
- サルトル, J. P. (1955) 想像力の問題——想像力の現象学的心理学 (平井啓之, 訳). 人文書院. (Sartre, J. P. (1940) *L'imaginaire*. Paris: Gallimard.)
- Schneider, A., & Domhoff, G. W. (2019) *DreamBank*. <http://www.dreambank.net/> (情報取得2020/5/15)
- スピエールバーグ, H. (2000) 現象学運動 (上) (立松弘孝, 監訳). 世界書院. (Spiegelberg, H. (1994) *The phenomenological movement: A historical introduction* (3rd ed). Dordrecht: Kruger Academic Publishers.)
- 滝浦静雄 (1988) メタファーの現象学. 世界書院.

- 谷川流 (2003) 涼宮ハルヒの憂鬱. 角川書店 (角川スニーカー文庫).
- 谷川流 (2004a) 涼宮ハルヒの消失. 角川書店 (角川スニーカー文庫).
- 谷川流 (2004b) 涼宮ハルヒの暴走. 角川書店 (角川スニーカー文庫).
- Thalheimer, W. (2010) *How much do people forget?* . Somerville, MA: Work-Learning Research, Inc.
- Theodorou, S. (2013) Metaphor and phenomenology. *Internet Encyclopedia of Philosophy*, 1-26. <https://www.iep.utm.edu/meth-phen/> (情報取得2020年5月6日).
- ウスラー, D. (1990) 世界としての夢——夢の存在論と現象学 (谷徹, 訳). 法政大学出版局. (Usler, D. v. (1964) *Der Traum als Welt: Untersuchungen zur Ontologie und Phänomenologie des Traums*. Pfullingen: Neske.)
- 渡辺恒夫 (2016) 夢の現象学・入門. 講談社 (講談社選書メチエ).
- 渡辺恒夫 (2018) 他者になる夢の現象学的解明——フッサール志向性論に基づく主題分析. 質的心理学研究, No.18, 66-86.
- 山内志朗 (2001) ぎりぎり合格への論文マニュアル. 平凡社 (平凡社新書).
- Zippel, N. (2016) Dreaming consciousness: A contribution from phenomenology. *Rivista Internazionale di Filosofia e Psicologia*, 7 (2), 180-201.

付記・謝辞

データ元であるインターネット上の筆者の個人ウェブサイト URL は、下記の通りである (掲載が決定した後に記載された)。 <http://fantastiquelabo.cocolog-nifty.com/>
本稿は、2017-2019 年度科学研究費：基盤 C (一般) 課題番号 17K02180 「夢の現象学」 (代表者：武内大・自治医科大学 (現・立正大学)) の援助を受けた。関係者の皆様に厚く御礼申し上げたい。

(2020.5.28 受稿, 2020.11.25 受理)